

書評

日本社会は今、変化しようとしている。歴史の連続性をおっかけていくとき見られる飛躍のチャンスがいろいろ転がっているという意味でだけでなく、日本人が日本社会を初めて相対的にとらえ、自分自身の手で変化させるといふ思想を伴った変化であると思われる。

この歴史の変化という言葉は、重々しいイメージを持つが、能動的姿勢を準備することにより手ごたえのある楽しいものに変えることができる。読者はひとりでしかなかった日本の戦後、あるいはそれよりも前の歴史を自分のものにして、これから先の見通しを決定していく快感を得ると思われる。

両者は日本社会に特徴的な天皇をキーワードにして論を展開する。タブーにこそそれを持つ社会の秘密を解く鍵があるわけだから、活用して下さいと待っているものをきちんと利用してあげて、いろんなものを可視化していくのである。そ

の面白さを少しでも伝えられたら本書評は成功したといえよう。

「二千年」の方はここまで述べた歴史の変革に日本社会が何の準備もしていなから話が發生している。まず世界情勢はこうで、数年後にはこういうことがどこでどう行われるかという話題をずらずらずらっと並べ、そういう重要なことをな

論 日本に何が起っているか

田原総一郎・栗本慎一郎 著

NESSCO 一、四五六円

冒険としての社会科学

橋爪大三郎 著

毎日新聞社 一、二六二円

いないということに気付かせている。そしてその勢いで、その体質を歴史的に培ってきた天皇のシステムと、日本社会の双対性を明らかにする。ここから、本書の遊びも同時発生し、この勢いのまま天皇というシステムの起源を追って縄文時代の空想へと視点をさかもとさせる。空想とはいえ話には整合性があり、読者を楽しめると同時に歴史をぐっと近くに引き寄せる。

「冒険」の方は「二千年」より土俵は限定されているがしっかりとしたインパクトを与えるという意味では負けてはいない。こちらは日本の社会科学をほんものにするとという大仕事への布石を敷く大事な役目を背負っている。それは自分達の社会を本当に解いていなければ始まらない。

この歴史観を確立することによっての自分達の社会を理解することができるので、社会科学を始めることができるのであり、立派な市民として生きることができるようである。このことは学問の世界にとどまらず、どんな世界にいても意味を持つと思われる。

(工学系院生 山田 義博)



「構造」と「法」——構造主義と仏教は、どう鏡映するか——

橋爪大三郎

◆序

かたや、現代思想としてヨーロッパの一角に、数十年前に登場した構造主義。かたや、インド文明圏から中国文明圏を貫いて、数千年の歴史を重ねてきた仏教。このふたつは、チ

構造主義と仏教は、どこまでが共通するのか。また、どこからがどう違っているのか。それを明らかにできれば、構造主義のことも、仏教のことも、ずっと見通しよく理解できるようになるにちがいない。

構造主義 (structuralisme) は一九五〇年代に、フランスの人類学者レヴィ=ストロースらが唱え始めた思想である。それ以来、現代思想の大きな流れになっている。

この構造主義が、仏教と接点をもつことになったのは、人類学の方法を通して、人間の「野生の思考」を説明しようとしたからだ。仏教は、洗練された体系的な古代思想で、独特の宇宙観をもつけれども、古くからの「野生の思考」めいたものを、あちこちに織りこんでいる。

構造主義と仏教に、共通なのはどんな部分か。仏教は、法 (dharma) 宇宙の法則秩序) をめぐる運動である。法は、合理的な思考によって接近できるといえるが、暗黙の知識や直観によって、体得すべきものだともいう。構造主義は、(意識や思考の背後にある知の法則秩序) を解き明かそうという運動である。(構造) は、神秘的なものでなく、科学的な方法によって接近できるといえるが、人びとの暗黙の思考を支配し、直観と一体になっているもの

1989-7 1/4

「仏教」Na 7 pp.119-125 法蔵館 1989年5月

1989-7 1/4

だともいう。

このように、法と「構造」は似通っている。しかも、法は、宇宙の森羅万象（全現象）を貫通する秩序だというのだから、当然、その一部である人間の思考も支配するだろう。それなら法は、「構造」の親玉のようなものであることになる。

*

それでは逆に、構造主義と仏教の、相違点とは何だろうか。構造主義には、「基本テーゼ」とも言うべき大原則（仮説のようなもの）がある。自然／文化（ないし社会）は、二つの異なる秩序であつて、連続した現象ではない（だから、切断されている）という仮説である。この仮説は、言語学者ソシュールがのべて以来のものだ。レヴィ・ストロースによると、近親相姦の禁忌が普遍的である理由も、これに関係がある。近親相姦の禁忌は、自然と社会のあいだに口を開いた裂け目のようなものだ、という。

ここで「構造」は、人間の思考の側、すなわち、文化に属する。自然なり、客観的世界の側に具わっているわけではない。人間の（暗黙で集合的な）思考をとり扱う方法（数学的手法）を通して、はじめて見えてくるようなものだ。

これに対して、仏教のいう法とは、思考の秩序であると同時に、思考されるものの秩序でもある。主観／客観の区別に関係なく、宇宙の全体に遍満する秩序（平和的で、調和的で、価値あるもの）のことなのだ。こう考えるのも、仏教がもつ

めることができるのであった。

*

法（が記述している宇宙の秩序）は、人間社会のルールなどよりも、ずっと広い範囲をカヴァーしている。その象徴が、輪廻である。

この社会で生きている人間存在など、広大な宇宙と比べれば、ちっぽけなものである。法のとらえる人間存在は、それよりずっと大きい。たとえば人間は、死んでもまた生まれ変わる。生まれ変わる先も、もとの社会とはかぎらない。人間はそんな具合に、これまでも生まれ変わりを繰り返してきたし、これからも未来永劫繰り返していくのだ（六道輪廻）。輪廻を支配するのも、法である。この前提に立って、同じ生まれ変わるのなら、よりよい来世（たとえば天）に生まれ変わろう、という修行が行なわれたりする。

輪廻の観念は、インド社会の構造的な矛盾（カースト制）と深いつながりがある、と言われている。カースト制は、外来民族がインドを征服し、先住民を支配下においたことに始まるらしい。カーストのような固定した身分制は、なんとも不合理なものであろう。それでも、輪廻を信ずると、いくぶん耐えやすくなるのかもしれない。ならば、それを逆手にとって、輪廻の観念を破壊（ないし無化）することでカースト制を乗り越えようという、一種の反体制思想が成立してもよいわけである。

もと、宇宙のほんの一部にしか通用しない法則（すなわち、人間社会の制度）に対する、反抗の戦略として出発したからである。

◆仏教と法

ところで法は、仏教に独自のものではなく、もともとはインド社会の固有信仰（いちおう、バラモンヒンドゥー教とよんでおく）になくはならないものだった。インド社会の人びとは、法なるものを信じている。法は、つぎのような特徴をそなえている。

第一に、法は不変である。この世界の、変化するように見える部分は現象にすぎず、その背後にある法は、変化しない（法の不変性）。

第二に、法は、価値あるもの（真理）である。法を知ることとは、無条件によいことなのだ。法を知ることが、一種の特権である（法の価値性）。

第三に、法は、日常生活を超越している。人間社会をそつくり支配しているのも法なのだが、人間がふつうに知りうる知識の範囲をはるかに超えて、この世界の外にあるさまざまな世界や、はるかな過去・未来にも及ぶものである（法の超越性）。

法がもつこうした特徴をそなえているため、インド社会の人びとの想像力がどれだけ昂進しようと、それを受け止

*

仏教がとつたのは、だいたいこういう戦略である。

バラモンヒンドゥー教は言うなれば、輪廻を信じる一種の「言語ゲーム」である。仏教は、この「輪廻のゲーム」を凌駕するために、それよりひと回り大きな「解脱のゲーム」を開始した。解脱（覚り）とは、バラモンヒンドゥー教が前提にするような法の束縛を、離脱してしまうことにほかならない。解脱をめざす修行が、インド社会（カースト制）の現状になじまないのは明らかだ。だからそういう修行が、インド社会の外に出た誓約共同体（サンガ）で行なわれることになったのも、当然といえば当然である。

（初期仏教教団の運動を考察した平川彰の仕事は、社会学の業績としてもきわめてすぐれたものである。彼の「原始仏教の研究」と「初期大乘仏教の研究」、ならびに、それらを言語ゲーム論の観点から再構成した、私の「仏教の言説戦略」を参照してほしい。なお、言語ゲームのなんたるかについては、私の「言語ゲームと社会学論」にのべてある。）

*

ここで問題にすべきなのは、解脱（覚り）と法の関係がどうなっているか、であろう。

仏教も、法を、宇宙に遍満する不変な秩序だと考える。ここまででは、バラモンヒンドゥー教とおなじである。ただ仏教では、それプラス、人間には解脱という、ある種の出来

1989-7 2/4

1989-7 2/4

事が起こって、そのあとではもう、法（因果律）に服さなくなる、と考えるのだ。

これはどういうことか？ 法は、宇宙（一切の現象）に遍満する秩序なのである。解脱ということがもしあれば、それは、この宇宙の「外」にでも飛び出してしまふことだろう。これがどんなことなのか、わかるのはむずかしいが、少なくともこの宇宙の側（こちら）からは、無に帰する（もはや何ごとでもなくなってしまう）ことだと言えない。

では、どのような場合に、解脱が生ずるのであろうか。解脱は、法の束縛を打ち破る、例外的な出来事だから、なにかスーパーパワーを必要とする。じつにブッダは、このパワーを蓄積した結果、解脱したので。

経典の説くところによると、このスーパーパワーの源泉は、法（ダルマ）を余すところなく認識することにある。法を認識することが、法を解脱するパワーの源泉である——これは、両義的な関係だ。つまり、一方で、法が価値あるものだからこそ、その認識がパワーに転化するのだけれども、もう一方で、法が最終的には肯定できないものなので、そこからの解脱がめざされなければならないわけだから。

* この両義的（どっちつかず）な関係のせいで、（インドの）仏教はふたたびもとのバラモン・ヒンドゥー教に吸収されてしまった、とも言える。

仏教の解脱（覚り）のありさまは、とりあえず、言表不能である。さしあたり信じるしかないのが、解脱だ。

法／解脱の関係は、インド社会／サンガ（僧伽）の関係と並行していた。インド社会に生活する在家の信徒は、サンガを、解脱の象徴とみる。けれども、サンガの目に見える部分——仏（仏塔）・法（経巻）・僧（サンガ）——は、別々の実体である。それらのかたに、解脱はあるはずだ。インド社会のふつうの人びと（在家）が、解脱（と等しい境地）に達する途はないものか。そこで、解脱を輪廻の論理（浄土への転生）で代替する浄土教だとか、解脱のあり方をひと足さきに感性的に体験する密教だとかいった、バラモン・ヒンドゥー教的な修行法が混入してくる。ついにはブッダをインド的な可能世界（パンテオン）の一角に押しこめてしまおうという、ヒンドゥー教のまきかえし（サンガの解体）を許すことになった。

解脱を語る言説よりも、法を語る言説のほうが積極的である。解脱の象徴よりも、法の象徴のほうが、インドに横溢する「野生の思考」と親和的である。

◆構造主義とへ構造

こんどは、構造主義について論じる番である。

構造主義の源のひとつが、ブルバキ派の現代数学であったことは、よく知られている。両者が精神的土壌を共有してい

るのは明らかだ。この学派の系譜をたどるなら、形式主義から射影幾何学、さらには遠近法にさかのぼることも不可能ではない。この系譜こそが、対象を「構造」においてとらえる研究方法を確立したので。

この系譜を考えに入れると、構造主義の輪郭が見えてくる。『はじめての構造主義』で私は、それを大ざっぱにスケッチすることを試みた。それをもっと煮つめて要約してみると、こんな具合になる。

* 構造主義の代表的な業績として評価の定まっている、レヴィ・ストロースの構造人類学を例に、考えてみよう。

彼の方法は、要するに、比較方法論である。まず、親族なから親族、神話なら神話の民族誌をいくつも、詳しく分析して要素の組合せにまで分解してしまう。つぎに、それらの間にどのような変換関係（要素の置換関係）が成立しているか、調べる。それから、その背後に隠れている、変換に関して不変な部分を探りあてる。こうして見つかるのが、「構造」なのだ。

人類学者が報告してくる、各地の神話や親族組織の具体的なあり方は、本来、数ある可能性のひとつにすぎないのだ。ある神話なら神話は、その社会の人びとがたまたまとった集合的な思考のあり方を示している。しかし、ただ眺めているだけでは、そのことが見えてこない。それを別の神話とつき

合わせてはじめて、どの部分が偶有的（表層）で、どの部分が本質的（へ構造）か、はつきりするのである。（もちろん、実際の分析手続きは、ずっとこみいつている。）

構造主義は、数学にヒントをえて、考察のレヴェルを、それまで人類学や言語学や文学や……がやっていたよりも、もう一段抽象的なところに引き上げた。直かに観察できるデータが、研究対象ではない。データの背後にある「構造」こそが、研究対象なのである。そして、この「構造」は、研究者がある方法をとるかぎり、それと相関して浮かび上がってくるのだ。たとえば、一連の神話を、互いに変換関係にあるものとみなす。するとそこに、神話の「構造」が見えてくる。これは、誰も気づかなかつたかもしれないが、じつは人びとの集合的（神話的）思考を支配していた秩序（いわば人間の精神性そのもの）なのである。

* ある社会の（目に見える）思考のパターンや制度に気づくことはたやすい。気づけばそこから逃れようとするのもできさる。しかし、自分の思考をとらえる「構造」に気づくのはむずかしい。「構造」は意識できない、暗黙のものである。

神話はいたいが、宇宙観（ある社会の人びとが宇宙をどのように考えているか）をあらわしている。すると、神話の「構造」が、仏教の法とよく似たものになることがわかるだろう。「構造」は、不変な、人間精神の本来の姿を反映する

1989-7 3/4

1989-7 3/4

ものだった。しかもそれは、社会の現実の姿（人びとの利害関心や価値観）からいちおう独立である。現象の背後に隠れている秩序。これこそ、法のあり方ではなかったらうか。

こう考えられるので、構造主義の思想を、仏教の覚りになぞらえたくなるかもしれない。だが、そう決めつける前に、〈構造〉と法の相違点のほうもよくみておくべきだろう。

まず法は、一種の因果論的な法則（縁起）である。観察可能な現象から法を導くのは、言うなれば帰納的な推論だろう。それに対して〈構造〉のほうは、こうした因果性とさしあたりなんの関係もない。それを導くのは、数学的（形式的）な操作である。

また法は、唯一の真理であることになっている。それに対して、ひと通りしかない。それに対して、神話なら神話の〈構造〉は、分析するたびにいく通りも現れてきてしまう。

……などといった点を考えると、〈構造〉と法を簡単に同一視してはまずいことがわかる。ではこの両者を、どのような関係にあるとみたらいいのか。

●〈構造〉と法

構造主義と仏教を、互いに鏡映しあうふたつの知のシステム、と考えることにしよう。（何をやりたいのか簡単に言うと、すぐれた構造主義者と仏教徒が出逢った場合、お互いをどう理解するか、考えたいのだ。）

構造主義は、一般的な分析方法である。したがって、構造主義に立脚して、仏教を理解できてよい。仏教も、人びとの集合的思考を実現したものであるから。神話と同じように、なにが〈構造〉を隠しているかもしれない。

いっぽう仏教は、ひとつの信仰である。信仰を前提とした、知のシステムである。このシステムは十分に強力なので、別な知のシステムを咀嚼して、自分のシステムに翻訳できるだろう。それは、相手が構造主義でも、同じことだ。

このように、両者は、相手を自分のなかに映しとり、呑みこみあう。一般に、ふたつの知のシステムの関係は、そうしたものだ。このもつれた関係を、双方どちらかの側からたどってみる以外に、両者を見渡せる特権的な場所が用意されているわけではない。

*

まず構造主義に内在してみよう。

構造主義は、仏教を、完結した知のシステムとみて、その〈構造〉をつかみだす。たとえば、仏教には、無数の経典があるが、それらを、同じことのいろいろな言い換え（変換）とみて、分析したりするはずだ。こうして、仏教徒でさえ気づかなかったような、暗黙の前提（仏教の深層）をえぐり出せるのが、構造主義の強みである。

このような作業を可能にする、形式的な分析技法（二項対立や、置換群のモデル）が、構造主義者の拠りどころである。

彼は、この分析技法（思考の冷静な手さばき）を、どんな場合も手放さない。対象と自分の思考回路とが必ず分離できることを、疑わないのだ。こういう二元性（対象と方法が分離できて、しかも方法が優位するという確信）を、構造主義は隠しもっている。

*

つぎに、仏教に内在するとどうなるか。

仏教は、単なる知識ではない。信である。その核心は、つぎの確信にある。

たしかに宇宙を、ある法則（法）が支配している。もちろんそれは、この自分の存在や思考も貫いている。そして、この事実をよくよくわかまえることが、最高の価値（覚り）に通じるのだ。法をわかまえ極めた最高の状態。それがどんなものか、自分にはまだわからない。覚りは、未踏の境地である。にもかかわらず、そこに自分のすべてを賭けよう。それでこそ、信なのだから。

（ただしここまでだと、仏教の信と、バラモンヒンドゥー教の信との、区別がつかない。そこで仏教徒は、ブッダの覚り（解脱）にならうことを、自分たちを識別する規準にしている。）

この仏教の目からは、構造主義など不徹底なものに映る。なるほど構造主義は、仏教の〈構造〉をみつけるかもしれない。あらゆる知のシステムの〈構造〉を発見し、人間の思考

がどんな法則秩序に従っているのか、明らかにするのかもしれない。だが、そんな分析をしている思考回路とは、何なのだろう。それが自分でみつけた〈構造〉と、どういう関係にあるのかを踏まえないうちは、知のシステムとして完全でない。構造主義は、自分の正体を知らないのだ。

自分の思考も〈構造〉に支配されている。証明できないが、構造主義者ならそう言わないと、議論が一貫しないはずである。そうすると、思考回路は思考回路のままにとどまらないで、世界のなかに投げ出されることになるはずだ。それをひと足先にやっているのが、仏教である。

仏教の信とは、この種のプラクシス（知行一致）である。そうであるかぎり、仏教は、どんなにプリミティブな部分を残していようと、構造主義（のような知のシステム）に吸収されたりしない。自己準拠する円環運動をつづけていく。そして、新しい衣装をまとった時代時代の知のシステムをかいくぐっては、繰り返しよみがえっていくであろう。

（社会学）

* "Structure And Dharma : How Structuralism and Buddhism reflect each other", by Hisuzue Daisaburo 1989 Feb.